BHE
Bureau of Human Empowerment

KiteKite

IMAZINE NO.4

ヒューマンエンパワーメント推進局（BHE）ジェンダー支援チーム広報誌

「秘密」

～インタビュー～ p.1~4
困りごとを解消し，解散を目指すー
生理用品シェアリングプロジェクト
「FLOW」運営メンバーに聞く

～おすすめ展示～ p.5~6
子宮の巡回展：100% WOMEN

～個人文～ p.7~12
秘密の「聞き手」
『Tip Toe』：見えるようになった後
「ネタバレ化」の引力に抗する

～活動報告～ p.13~14
ボランティアからもらった意見・感想

【編集】
ジェンダー支援チーム（GST）：恩田　馬　ga

HANASO!

「HANASO!」は，「IMAZINE」の読者の皆さんからジェンダーやセクシュアリティ，ジェンダー支援チームの取り組みなどに関する質問を募集し，学生スタッフがそれにお答えしたり，一緒に考えたりする企画です。
左のQRコード（Googleフォームに移動します）より，疑問，質問，お悩み，感想などをお寄せください。回答はもちろん匿名でOKです！
※いただいた質問やお悩みなどは，今後の IMAZINE に掲載させていただく場合があります。掲載を希望されない場合は，フォームにその旨をご記入ください。

BHE

ジェンダー支援チームは，全ての学内者が自らのジェンダ ー・セクシュアリティについて安全に話せる場所，セーフ ァースペース KiteKite (きてきて)」を運営しています。 詳細は組織のWebサイトからご確認ください！
※その他のジェンダー支援チーム の取り組みについても，組織のWeb サイト（左のQRコード）からご確認いただけます。
※ 公式 𝕏 アカウント @UTsukuba_gst

困りごとを解消し，解散を目指す

生理用品シェアリングプロジェクト「FLOW」運営メンバーに聞く

人口の約半数にあたる人々が経験し，日々の生活と密接にかかわっているにもかかわらず，公の場で語ることがタブー視されてきた生理（月経）の話題。生理に伴う困難は長らく「個人の問題」と見なされ，生理を経験する人［1］が「自律的」に対処することが規範化されてきた。それでも近年は，当事者による意見の発信や実態調査などを通じて，生理が心身の健康に及ぼす様々な影響や，経済的な要因などで生理用品を十分に入手できない，「生理の貧困（Period Poverty）」の問題が可視化されつつある［2］。これらの問題提起を受け，日本でもここ数年の間に，教育機関や公共施設で生理用品を無償で配布する取り組みが広がりを見せているが，筑波大学では2026年10月現在も，大学組織としての全学的な生理用品の設置や無償配布は行われていない。

こうした状況の中，筑波大学で性／ジェンダーに関する様々な活動を行っている学生団体「SODA.」の有志メンバーは，2026年の4月に「FLOW（フロー）」というプロジェクトを立ち上げた。FLOWは学内のトイレに生理用品の共有スペースを設置するプロジェクトであり，現在は1H棟1階の女性用トイレおよび多目的トイレに，生理用品（ふつうの日用／多い日用／夜用の3種類の生理用ナプキン）を設置している。

なぜこのような取り組みを始めたのか。その背景にある問題意識や，活動に伴う困難，そして今後の展望について，FLOWの発案者である西涼さん（社会学類4年），そして，西さんと共にプロジェクトの運営に携わっている粕渕友里さん（生物学学位プログラムM1），木下渓花さん（社会学類4年），北原琉愛さん（社会学類2年）にお話を伺った。　　（聞き手：恩田・中込）

――

――はじめに，FLOWの概要を教えてください。

西さん「筑波大学の中で，生理用品が手元に無くて困る，という状況をなくしていくことを目指したプロジェクトです。大学が生理用品を備品化してくれればよいのですが，今はそのような取り組みがないので，まずは応急処置として，現に存在する困りごとを解消していくために，この活動を始めました。

具体的には，1H棟1階の女性用トイレと多目的トイレにそれぞれ生理用品の入ったボックスを設置して，必要な方が利用できるようにしています。やはり資金の問題があるので，現在は『貸し借り』という形で，生理用品を利用した方には，余裕がある時でよいので，利用した分を補充していただくようにお願いしています。

1H棟を最初の設置場所に選んだのは，24時間アクセスが可能であり，TOEICなどで学外の方も多く利用される場所だという理由が大きいです。設置場所は徐々に拡大していきたいと考えており，現在は中央図書館のトイレに生理用品を設置できないか交渉を進めています。いずれは2・3学や医学エリアなど，他のエリアにも活動を広げていきたいです」

――設置している生理用品は，どのくらい利用されているのでしょうか。

木下さん「4月以降，平均して1週間に10枚前後のナプキンが利用されています。多い時では，週に40枚以上利用されたこともありました」

――プロジェクトを立ち上げられた背後にある問題意識について教えてください。

西さん「自分はもともと忘れ物をしてしまいがちで。高校までは生理用品を忘れても友達にすぐ借りることができたのですが，大学では受ける講義がばらばらで，周囲に頼れる人がいないことがよくありました。一応コンビニでも生理用品は販売されていますが，短い大学の休み時間では買いに行くのも難しいですし，まとめて購入しようとすると割高になります。そこで，周囲の人に頼れない状況でも，自由に生理用品を貸し借りできる場所があれば困っている人を減らせるのではないかと考え，このプロジェクトを着想しました」

――他の運営メンバーの皆さんは，どのような思いのもとでプロジェクトに携わっていらっしゃいますか。

木下さん「私は社会学類のクラス代表を務めています。昨年の秋に『クラス連絡会』という，学生と教員が学類の問題について話し合う会議が行われた際，学生からアンケートを通じて『大学で生理用品を備品化してほしい』という意見が寄せられました。これについて教員に提案したところ，すぐに実現することは難しいかもしれないが，学生側でもそのような取り組みの必要性をアピールしていくとよいのではないか，というアドバイスをいただきました。ちょうど同じ時期に西さんがFLOWを企画していたので，そこに合流する形で取り組みを進めていくことにしました」

北原さん「私は高校生の頃から生理の貧困の問題に関心があり，生理に対するタブー視をなくすために，学内外でワークショップや授業などの活動を行ってきました。西さんがおっしゃったように，生理用品を切らしてしまったり忘れてしまったりすることは多くの人が経験する困りごとだと思いますし，生理用品はトイレットペーパーと同じくらい必要なものなので，誰もがすぐにアクセスできるようにすべきだと考えています。なので，『貸し借り』の取り組みを拡大していくというよりは，最終的に大学による備品化を実現させる，という点に重きをおいて活動に参加しています」

粕渕さん「北原さんもおっしゃっていましたが，私も生理用品はトイレットペーパーと同じように，大学で備品として扱われるようになればいいな，と思っています。この男性中心的な社会において，仮に生理が男性も経験する現象であれば，生理用品はとっくに無償化されているのではないかと思うんです。それでも現状，生理用品を置いてほしい，という要求はすぐに『財源』の問題に還元されてしまう。それはなぜなのか，無意識のうちに『生理には個人で対処すべき』という規範意識を内面化しているのではないか，こういったことも，このプロジェクトを通じて多くの人に考えてほしいと思っています」

――活動の中で直面される課題や負担にはどのようなものがありますか。

西さん「まずは人手の問題です。現在はこの4人で利用状況の確認や生理用品の補充などを行っているのですが，自分も忙しいですし，これから設置場所を増やしていくと，人手はさらに必要になります。なので今後は，より多くの方と連携をしていきたいと考えています。それから，様々な理由で生理用品の返却が難しい方もいらっしゃるので，Amazonの『ほしい物リスト』を通じた生理用品の寄付をお願いしています。プロジェクトを持続可能な形で運営していくために，こちらについても多くの方にご協力をいただきたいです」

北原さん「時間の問題もあります。利用状況などのデータを集めて大学に要望を伝えたとしても，実際に生理用品が整備されるのにどのくらい時間がかかるか分かりません。先輩方が卒業されてしまうと，運営はどうなるのかという不安もあります」

木下さん「正直に言ってFLOWは，人手も生理用品の在庫もかなりカツカツな状態で回しています。今は頑張ってなんとかしていますが，本来これは学生が行う活動ではないと思っています。なので，FLOWが『うまくいっている』ように見えてしまうことで，かえって『学生だけでも十分できるじゃないか』と思われ，『生理用品を備品化してほしい』という要望が大学に伝わらなくなるのではないか，という懸念もあります。

　この前西さんと，『このFLOWというプロジェクトはいずれなくなるべき』だと話していたんです。このような取り組みは本来は大学が組織的に行うものであり，その意味で私たちは早く解散することが理想だと思っています」

西さん「ある意味，なくなることを目指して活動しているということですね」

――

←（左）：SODA. 公式ホームページ
→（右）：Amazon　ほしい物リスト（寄付用）

――最後に，大学や学生に対して伝えたいことはありますか。

西さん「生理用品を備品化してほしい，というのは，実際に困っているのでなんとかしてほしい，というシンプルな要望なのに，どうしても『男女の対立』という構図とか，あいつらだけずるい，みたいな話に回収されてしまいやすい。それはすごく残念なことだと思います。もっとニュートラルに『困っている人がいるなら，その人のために何かできないか』という見方をしてもらえたらいいな，と考えています」

粕渕さん「無償化の恩恵を受ける人，つまり生理のある人が『ずるい』という意見は，この問題を身近なものとして考えていない人からはけっこう率直な感想として出てきやすいのかと思います。でも，生理用品が無償化されたとしても，とても大きなマイナスがそこそこ大きなマイナスになるくらいで，別に得はしていないわけですよね。生理が無い人であっても，別の困りごとがあればそれは解決していくべきなので，この件も『誰がずるい』みたいな話には回収してほしくないと思います。怪我をしている人に絆創膏を渡すことが『ずるい』とは言われないのと，同じようなことなのではないでしょうか」

――非常に学びの多いお話をありがとうございました。「プロジェクトがなくなることを目指している」というお話を伺った後では，「これからも頑張ってください」という言葉は問題含みなようにも思われるのですが，大学による生理用品の備品化が実現し，皆さんが「頑張る」必要がなくなる日が1日も早く訪れるように，今後も応援させていただきたいと思います。改めて，本日は貴重なお話をありがとうございました。

※注

［1］「生理を経験する人」や「生理のある人」という表現は，本人のジェンダーとは関係なく，生理（月経）という身体的な現象を経験する人々を包括的に指し示すために用いられる。例えばトランスジェンダー男性や，出生時に女性と割り当てられた（AFAB）ノンバイナリーといった人々の中にも，生理を経験する人は存在する。そうした人々の経験や困難を不可視化しないことは極めて重要である。

［2］「生理の貧困」に焦点を当てた日本国内の調査としては，「#みんなの生理」が2021年に実施した「日本の若者の生理に関するアンケート調査」や，厚生労働省が2022年に実施した「『生理の貧困』が女性の心身の健康等に及ぼす影響に関する調査」などがある。

（構成：恩田）

読者の皆さんへ！

FLOWは学内で一緒に活動してくれる運営メンバーを募集しています。ご連絡はSODA. まで。連絡先はホームページに記載されています。また，ほしい物リストより生理用品の寄付をお願いしています。ご協力と応援をよろしくお願いいたします！

オススメ！

【写真源】
https://xhslink.cn/o/AQJZdxptWHy

～ 子宮の巡回展 ～

100% WOMEN（百分百婦女、百パーセント婦女）

「秘密」と聞くと、いつも「恥」を連想してしまう。その「恥」は、幼い頃に意図しない「お似合いカップル」のようにからかわれた時から、針のようにチクチクと体に刺さり続けていた。そして生理を迎える年齢になると、それは具体的な形を取り始めた。おろしたての生理用ナプキン、丸めて慎重に捨てられたナプキン、浴室に忘れられた使用済みのナプキン、道に落ちていたナプキン、教室でカバンからそっと取り出しポケットに隠すナプキン、スーパーの黒いレジ袋や茶色い紙袋……。生理は「生理」とは呼ばれず、「大姨妈（おばさん）」「あれ」「period」「日が来た」といったさまざまな隠語に置き換えられていく。子宮という一つの器官、そしてそれがもたらす様々な生理現象は、本来背負う必要のないはずのイメージをあまりにも多くまとわされ、それにまつわるすべてを隠さなければならないかのように扱われてきた。

1年ほど前、「100% WOMEN（百分百婦女）」という企画を知った。SNSで、一枚の大きな木板に多数のナプキンが飾りつけられている写真を目にし、大きな衝撃を受けたことがきっかけだった。さまざまな形態のナプキンの上には、生命力あふれる刺繍が施されていたり、色とりどりの生花が飾られたりしていた。写真を詳しく見てみると、それは「子宮の巡回展」という展示企画のものだった。企画者がたった一人でスーツケースを引いて、中国各地を巡りながら展示を行っているのだという。この展示は「子宮」を出発点として、生育機能だけではない女性が抱える身体的な痛み、そして自分たちの言葉にできない想いを探求するものだった。興味を持って実際に展示を訪れると、会場には先ほど触れたナプキン・アートだけでなく、身体のしくみについての解説、オリジナル缶バッジを自分で制作する体験型企画、そして子宮にまつわる絵画やインスタレーションといった，多くの作品が並んでいた。さらに「入場料無料での開催・グッズの販売・公益寄付」という取組みを通じて、生理貧困を解決するための生理用ナプキンの寄付活動も行われていた。

これまで隠されてきたモノや経験が、公的な空間で堂々と裸のまま展示される。それはまるで鋭い刃のように、曖昧で薄暗くモヤモヤとしたものを一気に切り裂いていくかのようだった。

（構成：ga）

秘密の「聞き手」

作者：馬

「秘密を話すから、ほかの人には言わないでね」

そう言われるたび、真っ先に頭に浮かぶ返事は、「私も『ほかの人』じゃないの？」だ。けれど、こうした「お願い」は、たいてい「命令」なのだ。私の返事を待たずに、相手は秘密をすっかり打ち明けてしまう。

私は「秘密を守れる人」と思われていて、他人の「秘密」をたくさん抱えている。zineの今号のテーマは「秘密」だが、何を書こうか、まだ決めかねている。もし人の秘密を大公開するとしたら、100号出しても書ききれないくらいだ。そこで、まず、これらの秘密の本質や意味から考えてみたい。

私に打ち明けられた「秘密」とは、いったい何なのだろう。

辞書によると、「秘密」には次のような意味がある。

1.他人に知られないようにしている事柄

2.公にされていないこと

まず、秘密は「他人」には知られてはいけないものだ。だとすると、相手は私を**「身内」**だと思っているのだろうか。次に、秘密は公にされていないものでもある。公にすれば、何らかのリスクや損失が生じたり、ほかの誰かが得をしたりするのかもしれない。ならば、私に話すのは、私が勝手に広めたりしないと思っているからか。それとも、たとえ私が広めたとしても、リスクや損失は生じないと思っているからなのだろうか。

そう考えると、私に打ち明けられた瞬間、それはもう「秘密」ではなく、共感を求めて気持ちを吐き出す行為になっているのかもしれない。相手は私に、理解して応えてほしいのだ。ここまできて、秘密が**親密さと信頼を意味**することは、少しわかった気がする。でも、本当に困るのは、その気持ちを受け取ったあと、どうすればいいのかということだ。慰めるのは、どこかおざなりな気がする。あっさり受け止めるだけでは、冷たく見えるだろう。かといって自分の考えに基づいて助言をしたり、何か行動を起こしたりすれば、上から目線というか、お説教くさくなってしまう。だから私は、たいてい「私にどうしてほしい？」と聞く。まるで安全対策の手順どおりに応答するAIだ。人間らしく、自分から同情したり、味方だと伝えたりはしない。

ところが、多くの場合、私が待っている取扱説明書は、相手の手元にもない。打ち明けた本人も、自分が何を期待しているのかわかっていないのだ。気持ちを吐き出したいのかもしれないし、認めてほしいのかもしれない。どこまで踏み込めるか試しているのかもしれないし、知られてしまうことへの密かな興奮があるのかもしれない。いずれにせよ、はっきりした指示はなく、

～個人文～

私はどうしていいかわからず、少し苛立ってしまう。少し抽象的かもしれないので、具体的な場面を一緒に考えてみよう。セクシュアリティにまつわる秘密を考えるとき、まず思い浮かぶのがカミングアウトだ。

「私、実は同性が好きなんだ。これを話したのはあなただけ」

ここで、自分なら本当に口にしそうな一言を、考えてみて、例えば…

「前からわかってたよ」

「これからどうするつもり？」

「私のことが好きなの？」

言う側としては、それぞれもっともな言葉に思えるかもしれない。

でも、言われた側にはどう届くのだろう。

「前からわかってたよ」で、ほっとする人もいるだろう。けれど、自分はこれまでいつ、どんな場面で観察され、勘ぐられていたのだろうと、過去を振り返り始める人もいるかもしれない。「これからどうするの？」には、心配の気配がにじむ。そして、同じ言葉でも、どんな関係のなかで交わされるかによって、その重みは違う。「相手が私にカミングアウトした」というだけでは、どんな言葉を返せばいいのか、私にはわからない。

けれど、その瞬間だけに話を限ってしまうと、聞き手の仕事を短く見積もりすぎている気もする。たとえば翌日、共通の友人が恋愛の話を始めたら、私は話題をそらしたほうがいいのだろうか。相手は、ほかに誰に話しているのか。もしほかの人がこの秘密を知ったら、私が漏らしたと思われて、距離を置かれるのだろうか。何もかもが、秘密をきっかけにひっそりと変わってしまったようだ。

だから私にとって、秘密を打ち明けられることは、親密さよりも**負担**のほうが大きいのかもしれない。そう考えると、自分が苛立つ理由も少しわかる。相手の信頼を大切に思いながらも、この先、気を配らなければならないことを考えると、どうしたものかと困ってしまう。特に、私たちが同じ人たちと付き合っているときは、なおさらだ。秘密は、それまで気軽にできていたおしゃべりにまで入り込んで、私をびくびくさせる。

ずるい考え方だけど、親密さだけを受け取って、負担は引き受けずに済ませたい。どこにリスクがあるのかわかれば、もう少しうまく対処できるのだろうか。つまり、私が知りたいのは、**何が「秘密」を「秘密」にしているのかということだ。**世間一般の美意識だろうか？社会制度だろうか？それとも、ほかの「聞き手」たちだろうか？

『Tip Toe』：見えるようになった後

作者：ga

※ネタバレ注意

誰が秘密を持っているのだろう。今の社会構造における「既得権益層」には、そもそも秘密なんてものはない気がする。あったとしても誰にも傷をつけない無邪気なものに過ぎないのではないかーーそんなふうに思うことがある。けれど、そもそも誰が本当の既得権益者なのだろうか。

『Tip Toe』。全5話のドラマ。描かれるのはわずか7日間の出来事だ。冒頭の1分でもう結末を明かしてしまう：誰かが死んだ、と。だからその後の5話分のあいだ、観る側は息をひそめ、びくびくしながら、それがどうやって起きたのかを見届けるしかない。この張り詰めた視聴体験を通して、脚本家の怒りをより直接的に感じた。それは無関心に対する怒りであり、「他者化された人の生がどんなものか知りたいのか？ なら、身をもって味わってみろ」と突きつけられているかのようだった。

クィアにとっての秘密といえば、たいてい「カミングアウト」が連想される。でもこのドラマでわたしがより強く見たのは、むしろ「男らしさ（masculine）」の「秘密」だった。ここでの秘密は、ただ隠されるものとは限らない。時には意図的に晒されたり、あるいはでっち上げられたりしながら、操られる。けれどどんな思惑があれ、秘密とは突き詰めれば己を守るためのものであり、だからこそ細心の注意を払って扱われるべきものなのだと思う。電気士の父親は、妻に浮気を問い詰められたとき、実際にはしていないのに「浮気した」と認めてしまう。その架空の秘密を背負うほうが男としての面目が保てるからだ。そして「本当は浮気などしていないのに嘘をついた」という事実自体が、また別の秘密になる。やがて長男が Only Fans で稼いでいること、次男がゲイであることを知ってしまうと、それも彼自身の秘密になるーー「本物の男」として、「まっとうな父親」として、決して守り抜かなければならない秘密として。

主人公のLeoは、クィアの権利のために人生の大半を捧げてきた人物だ。あの電気士の父親と、壁一枚隔てた隣人として十四年を過ごしてきた。夜も昼も互いの物音を聞き、互いの存在を知りながら、本当の意味での接触をしたことは一度もない。そんな暗黙の了解のなかで生きてきたこと自体が、不条理の始まりだ。そして本来「周縁化された側」であるはずのLeoと、その友人たちのほうが、むしろ秘密など持たずに生きているように見えるーー自由に生き、クィアの街でバーを営み、HIVを乗り越え、自分自身をありのまま受け入れて堂々と見せている。ところが、クィアのほうが、秘密を知る側になり、同時に秘密の責任者として名指しされる側にもなる。電気士の父親と息子たちのあいだで語られなかった秘密は、クィアたちのあいだで誰もが知る、いともたやすく口にできるものだった。彼らはクィアの空間にーーあらゆる意味での「空間」にーー勝手に踏み込んでくることができる存在だ。値踏みするようなまなざしで、あるいは好奇心から、あるいは怒りから、あるいは癒やしを求めて。秘密はこの場合でだけ、公になる。でもこの場所を一歩出れば、秘密は秘密であり続けなければならない。クィアの空間でしか語られてはいけなかった秘密が、別の場ーー「男」たちだけのサッカー観戦の日ーーで一気にぶちまけられたとき、その代償を払うのはクィアの側なのだ。ちょうど第1話で、Leoと友人が交わすこんな会話のように：

Leo Do you ever think it's coming back? All that shit from the 90s? We were despised, but you read the stuff online now, it sounds just the same.
Melba Do I think it's coming back? It's back, you fucking idiot. Right now, it's here. It's a storm, it's a tide, it's a great big tsunami, and we're in the middle of it right now. Do I think it's coming back? You know, if you'd asked me in 1996, "What do you think 2026 will be like?" I'd said, "Glory days. We'll have equality, we'll have love and kisses, we'll be holding hands, skipping down the streets." But they tricked us, didn't they? They just waited. Oh they let us all come out, so now we're standing in the open, ready for them to shoot us down.... Look at me, I'm as out and as proud as anything, but ...past couple of years, I'm a lot more careful.... I used to walk into a room and just go, "Ta-da." Now I tiptoe, just in case.

"Just in case." これこそがまさに、今の現実世界を映す言葉だと思う。踏み込んではいけない話題、慎重に選ばれる言葉。すべてが不気味な「公然の秘密」となり、誰もが暗黙のうちにそれを守っている。個々の差異は確かに「見え」てはいる。けれど、誰もが見えないふりを決め込んでいるのだ。それは良い「見て見ぬふり」ではない。頭上に研ぎ澄まされた刃を吊るされたような、冷たく張り詰めた沈黙だ。あるいは、この世界に本当の既得権益者などいないのかもしれない。けれど一つだけ確かなのは、秘密の蓋が開いてしまったとき、秘密が暴かれたときにその代償を払わされる側は、いつも決まっているということだ。

Leo ..., in the old days, if they hated us, you could say it was due to a lack of visibility, because we were hidden in basements like this. Fucking in the dark. No wonder they thought we were perverts. And so we fought to be seen. But what if we got it wrong? What if they see us and they still don't like us?

「ネタバレ化」の引力に抗する

作者：恩田

「叙述トリック」という言葉をご存じだろうか。ごく簡潔に説明すると，主に文字媒体のミステリー作品において，記述を工夫することで読者を誤解させ，驚きを誘う手法のことである。語り手が嘘をついていた，別人のように書かれていたA氏とB氏が同一人物だった，人間のように書かれていたC氏がオランウータンだった……等々。読者の先入観を利用し，提示する情報を上手く操作することで，叙述トリックは効果を発揮する。

この叙述トリックの典型例として，登場人物のジェンダーやセクシュアリティを誤認させる，というものがある。この人物はこういう言動をしているから男性だろう，この女性の登場人物の「恋人」は男性だろう……このような読者の思い込みを利用し，「実は語り手は男性的な口調の女性だった」「実は犯人は被害者と同性愛関係にあった」といった暴露によって衝撃を与えるというパターンである。この手の作品には，多くの読者が抱いているであろうステレオタイプを問題化し，再考を促すことを明確な意図として書かれているものがある（そういった作品を紹介したいのだが，核心的なネタバレになるからできないのが辛いところだ）一方で，ジェンダー規範に適合しない人々やセクシュアルマイノリティを，「奇妙な／異常な個人」として，「意外性」のための舞台装置としてのみ扱っているものも，残念ながら少なからず存在する。例を挙げると，著述家／運動家のジュリア・セラーノが指摘するように，「実はこの人物は女性としてパスして生活していたトランスジェンダーだった」という「どんでん返し」は，出生時の性別を「隠されていた真実」として提示し，それまで女性として認識されていた人物を「実は男性だった」と位置づけてしまう場合が少なくないのだ［1］。

叙述トリックが利用する読者の「思い込み」は，しかし，現実の人間関係においても同じように機能しうる。安堂ホセの小説『DTOPIA』（デートピア）［2］において，語り手のモモは，あるきっかけで友人の大野ファイヤード純がパレスチナにルーツを持つことを知り，大きな衝撃を受ける。ファイヤードとともに，日本に暮らすミックスルーツや移民の子どもたちのコミュニティに所属し，自分たちのルーツを問わないことを紐帯の前提として理解していたモモは，ファイヤードがパレスチナ出身の父親の話をしたことがあるにもかかわらず，そのことを忘却し，あたかもかれには人種が「無い」かのように接していたのだ。イスラエル軍の攻撃によって亡くなったパレスチナの人々の情報を目にしながら，モモはこう悔いる。「だってもし、仮にモモの見ている世界が作り物だったとしたら、ネタバレ化ってまさにモモがファイヤードにやってることじゃん」と（p. 121）。

ある人が特定の属性を持つ，という言及が「ネタバレ」や「どんでん返し」として機能しうるのは，読者が，あるいは現実における周囲の人々が，その人がそのような属性を持つことを想定していない場合である。仮にモモが，友人たちの間にも多様なルーツや帰属意識のあり方があるということを意識していれば，ファイヤードのパレスチナに関する言及にそれほど衝撃を受けることはなかっただろう。あるいは，この世界の多くの人々が，すべての人間が「異性」を愛するわけではないことを当然の前提として共有していれば，登場人物が同性愛者であることを「驚きの事実」として提示するミステリーなど，そもそも成立自体が困難になるはずだ。モモが悔いた「ネタバレ化」とは，相手が特定の属性を持つ可能性を想定しないことで，その人を強制的に「意外な事実を抱えた存在」という立場に置いてしまうことなのである。

多様な差異をもつ人々が共存する，というイメージを語るとき，私たちは得てして，その「差異」を肌の色や非規範的なジェンダー表現といった，目で見て分かる特徴として思い浮かべがちである。しかし実際のところ，性的指向や性自認，人種／民族的なバックグラウンド，身体や精神の障害などに関する様々な差異は，外見だけでは判断できない場合も多い。だからこそ私たちは，自分が目の前にいる他者について知っていることは限られており，その人の属性や経験を，自分の想定や外見だけに照らして決めつけることには問題があるということを，常に頭の片隅に置いておく必要がある。このような心掛けは，「同じ」ように見える相手が自分と「異なる」可能性を想定しないことで，意図せず差別的な言動を行ってしまう事態を回避するために，また，当事者が属性を開示しなければ，そのような差別に異議を申し立てることすらできないという残酷な状況を作り出さないために，極めて重要なものとなる。

言うまでもないが，それは他者の属性を詮索せよ，という意味ではない。重要なのは，外見では判別できないかもしれない様々な差異をもつ人々が，私たちの周囲で現に生活しているという事実である。私たちはこのことを理解したうえで，仮に自分が「ネタバレ化」をしていたことに気付いた際には，自分の思い込みを可能にしていた前提は何か，入念に問い直す必要があるのだ。それは言わば，過去の読書体験を踏まえて自身の先入観を問い，叙述トリックの可能性を念頭に置きながら頁をめくるミステリーマニアのように，現実を「読む」姿勢なのである。

※注

[1] Serano, Julia, 2016, Whipping Girl: A Transsexual Woman on Sexism and the Scapegoating of Femininity, 2nd ed., Emeryville: Seal Press.（矢部文訳，2023，『ウィッピング・ガール――トランスの女性はなぜ叩かれるのか』サウザンブックス.） 第2章を参照。
[2] 安堂ホセ, 2024, 『DTOPIA』河出書房新社.

「Tokyo Pride 2026」に出展2026年6月6日・7日

「(un)Twist the Straight Time」というテーマのもと、来場者に思いを書いてもらうメッセージボード、クィアな歴史パズル、クィアおみくじといった企画を実施しました。参加型の企画を通じて、性の多様性やクィアの歴史に触れ、時間や人生の歩み方に関する「当たり前」を問い直す場を創出しました。

自分自身が美大卒のためか、以前から周りの環境がちょっとユニークでした。身内もそうだし。「みんな違ってみんないい」と思ってるので、こういう大学の取り組みもいいと思います。マジョリティ、マイノリティっていう考えもなくなるといいなあ、って思ってます。それ自体が区別している気がするので、あまり好きな表現ではないです。来年ももし機会があったら、よろしくお願いします。

大学の学生と教職員という垣根を超えて、一つの企画を協働して作り上げるとても良い機会でした。
学生としては、普段は分野で分かれておりなかなか出会えない人もいる中、「クィア」という共通項を通して様々な人に出会い、多様な視点から一つのトピックについて考え直す機会にもなったかと思います。
何よりも、とても楽しい時間でした！

Tokyo Pride 2026 出展時の制作物は、関連書籍とともに
筑波大学附属中央図書館でも展示を行いました。

活動報告

雙峰祭に出展2025年11月2日・3日

「セーファースペース KiteKite」という企画を実施しました。クィアなキャンパスマップやボードゲーム、自分が安心できる空間を考える制作活動、プレイリストの作成といった活動を通じて、多くの来場者と交流しました。ジェンダーやセクシュアリティについて学び、誰もが自分らしく安心して過ごせる場の大切さを考える機会となりました。

人生ゲームが考えさせられるものでした。

詳細はこちらへ↑

ジェンダー支援チームの先生方もお疲れ様でした!
今後のイベントも楽しみにしています。

クィアな音楽や表現を知れて、自分自身もエンパワーメントされた。

筑波大学中央図書館において、公開展示企画「OUT IN JAPAN @ 筑波大学」を実施しました。OUT IN JAPANは、カミングアウトを選択したLGBTQ+当事者の写真を撮影し、ギャラリーを作り上げるプロジェクトです。今回は、同プロジェクトで撮影された写真と、その参加者たちによるメッセージに加え、LGBTQ+に関する書籍や、学生たちの思いを綴った文章も展示しました。当事者一人ひとりの「姿」と「思い」に触れることで、性的マイノリティを身近な存在として捉え、多様な性のあり方や生き方について理解を深める機会となりました。

OUT IN JAPAN @筑波大学 2026年1月15日~